

# 医科・歯科連携の実際

第12回

## 地域住民に信頼され、愛される病院に

大分県・国東市民病院  
歯科衛生士 岡林志伸

### はじめに

国東市民病院は、大分県国東半島最東端の国東市に位置しており、大分空港まで車で5分と近く、東京や大阪へ行くには大変に便利な立地となっている（写真1）。その反面、国東市にはJRが通っておらず、隣接市にある最寄駅の杵築駅までは車で30分かかり、陸の孤島ともいわれている。

国東市は平成18年3月31日をもって国見、国東、武蔵、安岐の4町が合併して誕生し、それに伴い、東国東広域国保総合病院から国東市民病院（以下、当院）として生まれ変わった。当院は「住民に信頼され、愛される病院を目指して良質で全人的な医療を提供し地域包括医療・ケアを実践します」を基本理念にあげ、内科、外科、脳神経外科、小児科、歯科口腔外科など15の診療科と208床の病床を有する東国東地域唯一の自治体総合病院である（写真2）。

国東市の高齢化率は平成24年2月末で35.9%だったが、平成25年12月末では37.54%と年々高齢化率が高まる超高齢化地域である。そのため、高齢者がなんらかの疾病において入院した場合、廃用が進んで入院が長期化し、要介護状態に陥ることも稀ではない。実際に要介護認定率も大分県平均20.1%に比べ、国東市では20.5%と0.4%高くなっている。特にここ数年、当院では誤嚥性肺炎をたびたび発症し、入退院を繰り返している症例が増えてきている。また、再入院のたびに栄養状態は悪化し、褥瘡も併発している場合も少なくない。このため、多職種連携による摂食嚥下リハビリテ



写真1 国東市民病院と大分空港の位置関係

ーションや口腔ケアの必要性は増すばかりである。

### 災害訓練

当院は大分空港が近いことから、災害拠点病院となっている。毎年、地震などの災害に備えて、国東市と国東市消防本部と協力し、合同災害訓練をおこなっている（写真3）。昨年は国東高校、溝部学院看護学科の学生のボランティアが参加し、総勢200名を越す訓練となった。トリアージをおこない、緑・黄・赤・黒の各エリアで処置するのだが、歯科衛生士といった職種ではなく、一医療人として活動しなければならない。知



写真2 国東市民病院外観



写真4 病院祭での餅つき



写真3 合同災害訓練



写真5 歯科の健康相談

識や情報の共有化が非常に重要で、多職種連携の必要性を強く感じている。

## ■ 病院祭

当院では毎年、病院祭を開催している。病院職員による健康相談（薬剤師によるお薬相談・管理栄養士による栄養相談・放射線技師による骨密度測定など）や、杵つきの餅つきもおこなわれ、来場者に無料配布している（写真4）。駐車場を開放し、職員のみならず地域住民による模擬店なども多数出店している。病院職員が持ち寄った品物によるバザーでは、整理券を配布しても行列ができるなど、大好評を得ている。国東市の消防署にも協力してもらい、救急車と消防車も展示されており、小さな子どもたちに人気である。

歯科は毎年、健康相談（口腔検診やフッ素塗布や歯磨き指導など）を行っている（写真5）。今年は4月27日に開催され、口腔がん検診を行ったところ16人の

検診希望者がいたが、幸いなことに一人の該当者もなかった。「人間ドックや住民健診では口腔の検診がなく、口腔も気になっていた」といった声も聞かれ、住民検診時に口腔検診をおこなう必要性も感じられた。また今後、国東市歯科医師会が中心になり、口腔がん検診をおこなう予定である。

## ■ 歯科口腔外科について

歯科口腔外科は、平成元年6月に歯科医師1名と歯科衛生士2名で開設され、今年の2月からは歯科医師2名（日本口腔外科学会専門医、同学会専修医）と歯科衛生士3名（うち1名が地域包括ケア認定歯科衛生士）が所属している。外来業務だけではなく、訪問歯科診療、入院患者の口腔ケア、栄養サポートチーム（以下、NST）のカンファレンス・ラウンド、VF（嚥下造影検査）、地域住民への口腔機能講話など、幅広い業務に携わっているため、決して恵まれた人員構成とは

図1 歯科口腔外科外来患者年代別内訳 (5,523件)  
2013年4月～2014年3月

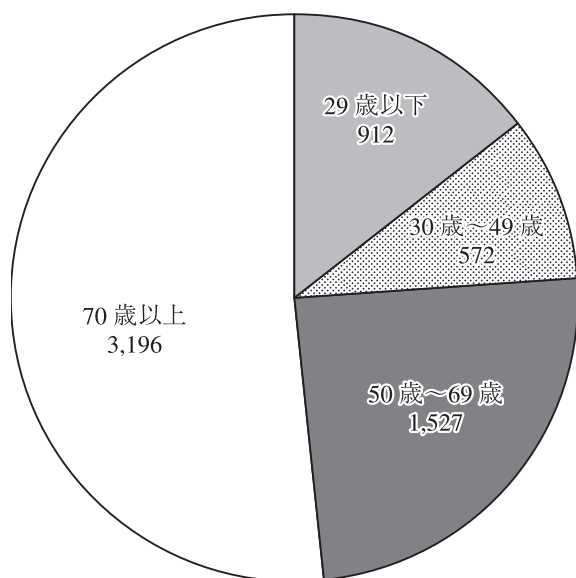
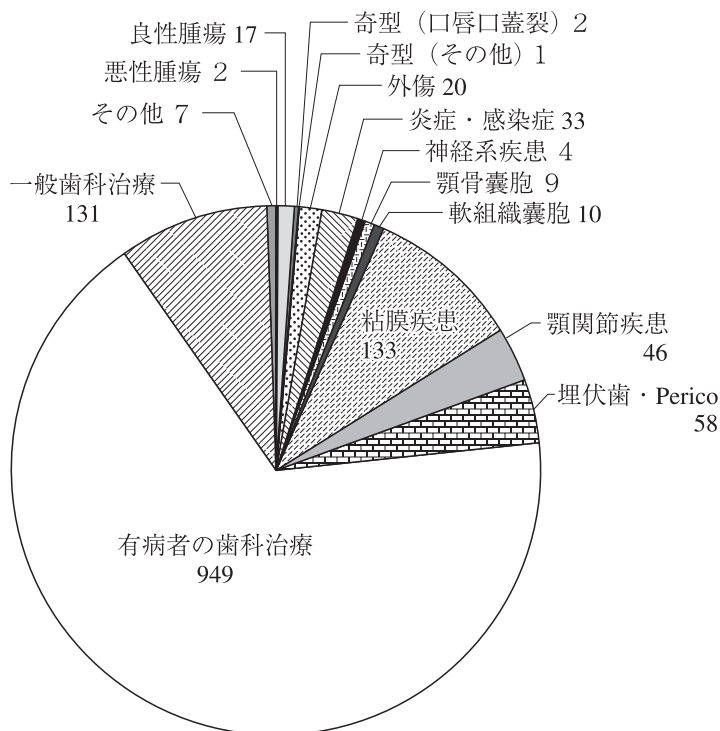


図2 外来新患症例 (1,432例) 2013年4月～2014年3月



いえないと思う。しかし、国東地域住民の健康を通して地域医療を守るべく、日々の研鑽に努めている。外来患者の大多数は高齢者であり、昨年度の外来患者の年代別内訳 (図1) に示される通り、70歳以上が多数を占めている。近隣の歯科医院や開業医の先生方から、高血圧や糖尿病、心臓病などの基礎疾患を持った患者の紹介も多く、問診にはかなりの時間と知識が必要である (図2)。

## □ 口腔評価の必要性

NSTのカンファレンス・ラウンドは、内科医師、歯科医師、薬剤師、管理栄養士、看護師、言語聴覚士、歯科衛生士の多職種連携でおこなっている (写真6)。毎週、月曜日の正午までに各病棟から依頼入力された入院患者を15時からラウンドし、その後カンファレンスを経て、結果を各患者の電子カルテに記載している。

昨年度の年間ラウンド数は747件で、週平均15.6件となっている。NSTラウンド時、患者のベッドサイドに行くと破折していたり、不適な義歯を目にすることが少なくない。自宅や施設で不自由を感じながらも歯科医院まで遠いから、通院に不便だからといった理由で歯科治療につながっていない。寝たきり状態であれば訪問歯科診療の対象になるのだが、要支援や介護認

定を受けていない独居老人などが、歯科治療を希望しながらも通院困難になっている。

入院中に歯科治療ができること説明すると、希望されることが多い。NSTによって栄養状態を評価し、必要な栄養素やカロリーを提言しても、それを咀嚼できる口腔でなければ、まったく意味がなくなってしまうのではないだろうか。少なくとも、経口摂取による栄養評価をおこなうのであれば、歯科と連携をとり、必ず口腔の評価もおこなうべきだと感じている。もちろん、経口摂取の可否に関わらず、高齢の入院患者においては口腔を評価することは非常に大切である。患者本人や家族からの訴えのみならず、評価し歯科治療の必要性を説明するべきである。

## □ 要介護状態になるまえに

口腔機能講話では、機能が落ちてからではなく、予防が必要なことを説明している (写真7)。このことから、高齢者本人だけではなく、特に孫などの幼少期から口腔に対する知識や機能を知ってもらい、予防につながるように受講者が帰宅してから、家族に対して



写真6 NSTのカンファレンス・ラウンド



写真8 最期まで自分の口で「食べる、話す、笑う」



写真7 口腔機能講話

話せるような内容に努めている。健康サロンや老人クラブなどが母体となっているため、講話の後は受講者に囲まれて、お茶や食事をいただくこともあるが、この時間に質問攻めになることが多い。また、受講された方が、その後歯科治療に通院を始める例も少なくない。「お話を聞いて来ました」と、笑顔でいってもらえることはとてもありがたく感じている。

### ■ 今後の課題

現在、国東市には当院を含め13軒の歯科医院が診療している。しかし、国東市の高齢化率と比例するよう

に歯科医院の先生方の高齢化率も進んでおり、近い将来は歯科医院の軒数も減ることが予想されている。当院の担うべき役割もさらに大きくなるであろうことは想像するに容易い。また、歯科医院や介護施設に従事している歯科衛生士同士の連携が取れておらず、知識や情報の共有化が図れていない。住民を中心におき、連携が取れるようになることが、自治体病院に所属する私たち歯科衛生士の役割ではないかと感じている。

最期まで自分の口で、「食べる、話す、笑う」ことができ(写真8)、健康寿命を延ばしていけるように、また、「国東市の住民でよかった」と思ってもらえるように活動していきたいと思っている。